

学会刊行物の在庫について

現在「気象研究ノート」、「夏季大学テキスト」、「気象学の手引」等の在庫があります。今がお求めの絶好のチャンスです。お陰で売り切れが続出しました。残部の少ないものもありますので、ご希望の方は、申込者名・送り先・希望の印刷物と冊数・代金の支払方法を明示して、お早目に日本気象学会事務局（〒100 東京都千代田区大手町1-3-4 気象庁内）へお申し込み下さい。（郵便振替 東京 3-5958）

気象研究ノート

- 第9巻3号（1958年8月） 僅少
（航空と気象）
- 第14巻1号（1963年8月） 僅少
（日本の天気（6）各地の天気）特集
- 第100号（1969年） 僅少
（回顧と抱負）特集
- 第116号（1973年11月）
ライダー（レーザーレーダ）と気象観測
- 第122号（1974年11月）
雲物理特集Ⅱ — 雲核・氷晶核 —
- 第123号（1974年12月） 僅少
雲物理特集Ⅲ — 雪結晶・あられ・ひょうの生成 —
- 第124号（1975年8月）
流れの可視化法
追補 境界層と乱流
- 第126号（1975年11月）
大気中の内部重力波
Ⅰ. 内部重力波の理論……………田中 浩
Ⅱ. 超高層の大気波動……………加藤 進
- 第127号（1975年12月）
大気汚染気象特集
大気境界層の拡散に関する構造……………横山長之
大気中のガスや粒子状物質の変遷……………大喜多敏一
光化学大気汚染に関するシンポジウム
・光化学大気汚染中の反応のモデル化と
その素反応論的基礎……………秋元 肇
・大気汚染物質の分布と気象条件との関
係……………福岡三郎
・光化学大気汚染のモデリングとシミュ
レーション……………木村富士男
・討 論
（付録）大気汚染気象用語集……………河村 武
- 第128号（1976年3月）
最近の気象学と気象事業の展望
— 気象庁創立百年を記念して —

1986年6月

第129号（1976年9月）

台風特集

- 第1章 台風の構造と発達の力学……………山岬正紀
第2章 熱帯低気圧の発生と台風観測
……………井沢龍夫・門脇俊一郎
第3章 台風の進路とその予報
……………野本真一・岡村 存
第4章 台風災害……………奥田 穰

第134号（1978年3月）

数値予報

- 数値予報の歴史的展望……………岸保勲三郎
基本方程式とエネルギー論……………相原正彦
積雲対流のパラメタリゼーション……………山岸米二郎
境界層の取扱い……………片山 昭
放射による加熱率の差分計算法と
その北半球分布……………久保田 効
客観解析法……………清水喜允
4次元同化作用とイニシャリゼーション
……………住 明正
数値計算上の問題……………本田秀次・岡村 存
近藤洋輝・菊池幸雄
数値予報プロダクトの利用
……………立平良三・菊池正武
予報可能性と延長予報……………住 明正
世界のオペレイショナル・モデルの現状
……………吉田泰治

第135号（1978年9月）

海洋力学

- 総論……………吉田耕造
海洋大循環……………高野健三
海面付近の力学……………鳥羽良明
海洋における地形性モード波……………梶浦欣二郎

第136号（1978年12月）

融雪なだけ特集

- 融雪機構と熱収支……………小島賢治
融雪水の積雪内部への浸透……………藤野和夫

融雪水の流出……………小林大二
なだれ……………清水 弘

第138号(1979年1月)

梅雨前線帯の豪雨

極東における梅雨前線帯…二宮 洸三・秋山孝子
大雨を伴う梅雨前線帯の構造……………吉住 禎夫
梅雨前線帯の中間規模擾乱の構造

……………吉住 禎夫・二宮 洸三
梅雨前線に及ぼす積雲対流の影響

(数値予報モデルによる実験)……………二宮 洸三
豪雨の水収支……………二宮 洸三・秋山孝子
梅雨前線帯の下層ジェットと

レインバンド……………二宮 洸三
大規模低気圧にともなう豪雨……………二宮 洸三
中間規模擾乱に伴う降雨の微細構造

……………秋山孝子・二宮 洸三
豪雨の中規模的様相……………二宮 洸三
積雲対流と豪雨……………二宮 洸三・山崎孝治

日本の豪雨の気候学的特性と
地形性降雨……………二宮 洸三・榊原 均

第140号(1980年8月) 僅少

気候変動シンポジウム (I)

—諸要因の変動—

過去の気候変動……………高柳洋吉
太陽放射の変動性……………桜井邦明

第四紀の火山活動……………町田 洋
最近の火山活動……………山元龍三郎

地球軌道要素の変動……………中島映至
地磁気変化……………川井直人

第141号(1981年5月)

気候変動シンポジウム (II)

—諸要因の変動—

世界気候プログラム(WCP)について

……………関口理郎
気候における雲の役割……………武田 喬男

気候モデルにおける雲の取扱い……………久保田 効
黒潮の長期変動……………寺本俊彦

海が運ぶ熱量……………高野健三
大気海洋相互作用にかかわる

海洋変動へのアプローチ……………鳥羽良明
砂漠の変動……………鈴木秀夫

第144号(1982年3月)

気象の遠隔測定 (I)

大型レーダーによる中層大気の観測

……………加藤 進・福山 薫
若杉耕一郎・佐藤 享
深尾昌一郎

マイクロ波によるリモートセンシング…青木忠生
合成開口レーダ……………小平信彦
音波電波を利用した晴天大気の

リモートセンシング……………福島 圓

第145号(1982年12月)

衛星資料の利用

会田 勝・二宮洸三・多田一正・村上勝人・
安成哲三・小花隆司・清水喜充・磯崎一郎・
竹田 厚・赤川正臣・石原健二・落合弘明・
大貫仁八・駒井二郎・下田陽久

第146号(1983年2月)

エアロゾル特集 (応用編)

硫酸エアロゾルの生成……………池辺幸正・鈴木国弘

エアロゾルの輸送……………佐藤公喜
エアロゾルの除去……………遠藤辰雄

対流圏エアロゾルの空間分布……………森田恭弘
エアロゾルの気象に与える影響

(雲粒を通しての影響)……………児島 紘
エアロゾルの気象に与える影響

(日射に対する効果)……………村井潔三
成層圏エアロゾル層の観測……………岩坂泰信

第147号(1983年3月)

日本とその周辺古気候復元 (特集号)

序……………吉野正敏
世界と日本の古気候……………吉野正敏

古環境による日本とその周辺古気候
復元……………小野有吾・堀 信行
遠藤邦彦・安田喜憲

堆積物の各種分析から見た最終氷期
以降の気候変動……………安田喜憲

第148号(1983年5月)

気象の遠隔測定 (II)

静止気象衛星の画像データによる
気象要素の抽出……………加藤一靖

赤外線放射を利用した気象要素の遠隔
測定

I. 人工衛星および航空機等による
測定……………嘉納宗靖

II. 地上から見た場合の遠隔測定……………宮内正厚

ライダー観測による気象要素の測定……内藤恵吉
第149号(1984年6月)

モンスーンをめぐる諸問題

モンスーンの変動に及ぼすチベット

高原の影響について……住明正・村上多喜雄
第150号(1984年8月)

最近の予報

確率予報……………立平良三・保科正男
量的予報：気温……………三瓶次郎
量的予報：風……………野本眞一
週間天気予報

……………齊藤勉・小林典謙・矢花楨雄
第151号(1985年2月) 僅少

気象とカタストロフィー……松田佳久・余田成男

第152号(1985年12月)

気象学における流体実験

気象研究用流体実験装置……………北林興二
模型実験の相似律……………北林興二
風洞測定装置……………小川靖
風洞実験データの収集と解析……………藤谷徳之助
流体実験の実例(I)

……………北林興二・花房龍男・光本茂記
流体実験の実例(II)……………新野宏
流体実験の実例(III)……………小川靖・北林興二・
加藤真規子・坂上治郎

配布価格

号	9-3	14-1	100	116	122	123
通常会員	300	380	750	950	970	1,400
定期購読						
団体会員	400	460	940	1,380	1,500	2,100
会員外	450	500	1,020	1,550	1,700	2,400
号	124	126	127	128	129	
通常会員	710	650	870	2,560	2,400	
定期購読	670	600	800	2,440	2,250	
団体会員	1,080	1,000	1,300	3,900	3,600	
会員外	1,200	1,100	1,500	4,400	4,100	
号	134	135	136	138	140	
通常会員	4,000	1,200	1,250	2,700	1,250	
定期購読	3,800	1,100	1,200	2,570	1,200	
団体会員	6,100	1,800	1,900	4,000	1,900	
会員外	6,850	2,000	2,150	4,500	2,100	

1986年6月

号	141	144	145	146	147
通常会員	940	1,100	3,800	1,650	1,200
定期購読	900	1,050	3,600	1,600	1,100
団体会員	1,400	1,700	5,800	2,500	1,800
会員外	1,600	1,900	6,500	2,800	2,000
号	148	149	150	151	152
通常会員	1,600	1,300	1,100	1,500	1,400
定期購読	1,500	1,050	850	1,200	1,100
団体会員	2,400	1,800	1,400	2,000	1,900
会員外	2,700	1,950	1,600	2,200	2,100

その他の刊行物

○Proceedings of the Symposium on the Use of Satellite Data in Meteorological Research, November 3-5 1978 Tokyo 1,000円

○WMO Programme on Research in Tropical Meteorology Extended Abstract of Papers Presented at the MSJ/JMA/WMO/AMS Regional Scientific Conference on Tropical Meteorology (Tsukuba, Japan, 18-22 Oct. 1982) 2,200円

○新しい気象学(夏季大学テキスト)

第9回(学校における気象教育)1975年

学校における気象教育のあり方……………高橋浩一郎
初中等教育における気象学……………齊藤実
大気汚染観測と整理……………河村武
気象の実験I：氷晶核の測定

雲はどのようにしてできるか……………田中豊顕
気象の実験II

雲粒と降水粒子の測定法を中心にして……………佐粧純男
気象のカリキュラムの実際と指導……………高井浩深
新聞天気図を利用した実習……………高井浩深

第11回(学校における気象教育特集)1977年

天気図でみる高・低気圧の構造……………矢花和一大
大気境界層の気象……………島貫陸
学校における気象観測と観測データの

学習への活用……………原嶋宏昌
パネルディスカッション(話題提供要旨)

学校における気象教育……………伊藤久雄
小学校における気象教育……………吉野清

中学校における気象教育……………蒔田真一郎
高等学校における気象教育……………三芳英

気象学の正しい理解が必要……………島貫陸
第14回(台風特集)1980年

台風の構造と発生・発達について……………山岬正紀
 台風の数值実験……………北出武夫
 台風の解析と予報……………上坂慶正
 「ひまわり」から見た台風……………山下洋
 台風業務実験……………平塚和夫
 台風と災害……………奥田稜
 降水の確率予報……………立平良三・保科正男

第15回(熱収支と気候変動特集)1981年
 最近の気候変動と異常気象……………能登正之
 太陽放射と地球放射……………会田勝
 簡易日射計の考察……………会田勝
 気象衛星写真の見方……………柴田宣
 気候に影響する大気中の微量成分……………三崎方郎

第16回(海と山の気象特集)1982年
 生活と天気予報……………加藤久雄
 雷……………北川信一郎
 日本の山岳気象……………飯田陸次郎
 波浪予報の発展……………小野田仁
 海の浪の主な性質……………小野田仁
 海陸風と山谷風のシミュレーション……………荒川正一

第17回(新しい気象観測特集)1983年
 地球流体実験……………木村竜治
 境界層の観測……………藤谷徳之助
 人工衛星データ処理……………土屋清
 地震予知の現状……………長宗留男
 Nowcast……………池田学
 今後の気象衛星……………里見穂

第18回(天気予報と数值予報)1984年
 数值予報発展の歴史……………山岸米二郎
 天気予報の現状, そのシステム……………草野梓
 数值予報の最先端……………佐藤信夫
 大気大循環数值モデル……………時岡達志

異常気象レポート……………朝倉正
 衛星画像からみた大気中の諸じょう乱……………加藤政勝

第19回(地球をめぐる風)
 高層大気の大循環……………廣田勇
 高層天気図の話……………丸山健人
 <実習>高層天気図……………丸山健人
 局地的な強風現象……………相馬清二
 気象衛星から得られる風情報……………嶋村克
 日本周辺の地震発生の特徴と
 その予知の現状……………吉田明夫

配布価格

第9, 11回	1,000円
第14~16回	1,000円
第17~19回	1,300円

○気象学への手引	350円
続・気象学の手引	850円

○構造物の耐風性に関するシンポジウム論文集

第1回(1970年)	1,500円
第2回(1972年)	2,000円
第3回(1974年)	2,500円
第4回(1976年)	3,000円
第5回(1978年)	3,500円

○風工学シンポジウム論文集

第6回(1980年)	3,500円
第7回(1982年)	4,500円
第8回(1984年)	5,000円

○百周年記念事業関係

「天気」29巻4号(記念号)	(会員 850円) (一般 1,200円)
「気象集誌」60巻1号(記念号)	(会員 3,000円) (一般 4,000円)
日本気象学会100年史	400円

編集後記：春季大会も盛会のうちに終了した。しかしこの間に我々の身のまわりにはかつてない大変な事が起こった。

4月26日早朝、ウクライナ共和国チェルノブイリにある黒鉛減速軽水冷却型原子炉を使用した原子力発電所の4号炉が事故を起こして大量の放射性物質が空气中に放出された。当初この影響は局地的なもので日本にまで及ぶことはないと考えられていたが、5月3日から日本各地の降水や空气中の放射能レベルは急上昇し、ことに短寿命の放射性ヨウ素 (¹³¹I) が検出されるに至った。原

子力安全神話もろくもくずれ去った事をよく示しているが、気象学的には、もう一つ大切な事として、対流圏下部の物質輸送が今迄の常識と異なり全地球的なものであることを示している。大気中の Life-time が1週間以上のものならば、ヨーロッパで起こった事は日本に伝わり、更に世界をめぐるのである。1週間分の食糧と燃料をもってヨーロッパから日本への気球の旅をするという事も気象学の実験として考えられてもよいのではなからうか。(長)